

国立研究開発法人 国立国際医療研究センターの薬剤師レジデント制度とその現況 (8)

薬剤師レジデントの研修で得た経験と修了後の現況

国立研究開発法人 国立国際医療研究センター病院 薬剤部

原 量平 (レジデント5期生)

1. はじめに

私は平成26年4月より国立国際医療研究センター病院 (以下、当院) の第5期薬剤師レジデントとして2年間の研修を行った。現在は、当院の常勤職員としてリウマチ・膠原病内科・泌尿器科・眼科・皮膚科・形成外科の5診療科が混在する病棟を担当しながら、後進の教育にも携わっている。本稿では私がレジデント研修で得た経験、現況と今後について紹介したい。

2. 薬剤師レジデントになるまで

大学在学中、病院薬剤師として勤務したい気持ちは強く持っていた。しかし、大学を卒業し国家試験に合格して病院に勤務したとしても、薬剤師としての責務をきちんと全うできる自信はなかった。学生時代は、感染症と薬物動態・TDMに興味を持っていた。そのような中、大学6年次に「感染症、病院、薬剤師」をキーワードに様々な情報を探していたところ、当院薬剤部のホームページを見つけたのが運命の出会いだった。薬剤部の見学会に参加してレジデント研修の内容を聞き、レジデント研修の2年間で薬剤師としての基本的な業務が身につけられ、感染症、TDMに関して深く学べると考え、当院の薬剤師レジデントに応募した。

3. 薬剤師レジデントの研修

レジデント1年目はカリキュラムに沿って、調剤、製剤、抗がん剤混注、医薬品管理、医薬品情報といったセントラル業務を十分に学習することができた。1年目後半から病棟業務が始まり、当院の特徴であるHIV感染症はもちろん、総合病院という特性を活かした多彩な診療科の薬物療法に

触れることでgeneralistの基盤を身につけることができた。レジデント研修の中でも現在の私に大きく影響を与えているチーム医療への参画と、学会発表について述べたいと思う。

①チーム医療への参画

当院ではInfection Control Team (ICT), Nutrition Support Team (NST), 緩和ケアチームなど多職種からなるチームに薬剤師が参画している。レジデント研修で上記3つのチームのカンファレンス、回診を経験することができた。その中で最も印象に残った緩和ケアチームに関して述べたい。

当院の緩和ケアチームは週2回のカンファレンスと回診を行っており、医師、歯科医師、看護師、ソーシャルワーカー、臨床心理士、管理栄養士、薬剤師が参加している。カンファレンスでは疼痛緩和に関することだけでなく、社会背景、患者の栄養状態、心理状況に関する話題が挙がっていた。薬剤師としては疼痛緩和に使用する薬剤だけではなく、その他、合併症等を目的に使用している薬剤に関する視点からの助言を行っていた。各職種がspecialistとして職能を発揮しているのを体験し、他職種の視点に触れることができ、非常によい経験となった。

現在、緩和ケアチームに私は参画していないが、チームに参画している担当の薬剤師と情報を交換しながら、連携するよう努めている。

②学会発表

2014年12月3日～5日、大阪で開催された第28回日本エイズ学会学術集会・総会で『抗HIV薬の吸収阻害が疑われウイルス量の低下が遅延した一例』という演題でポスター発表を行った。学会発

表までの道のりは容易なものではなかったが、先輩薬剤師、エイズ治療・研究開発センターの医師からの助言を多数いただき発表することができた。研究課題の検討・進め方、資料・データ収集の方法・まとめ方、ポスターの作成方法などをこの間に学ぶことができた。レジデント修了後も引き続き2015年11月30日～12月1日、東京で開催された第29回日本エイズ学会学術集会・総会において『抗HIV薬の選択と年齢に関する調査』という演題で口頭発表を行った。継続して学会発表・参加できる環境にとっても感謝している。

4. リウマチ・膠原病内科での病棟業務

レジデント卒業後は、当院で常勤職員として採用され、現在はリウマチ・膠原病内科を主とする病棟担当薬剤師として勤務している。

リウマチ・膠原病内科の特徴として、副腎皮質ステロイドや免疫抑制薬を使用する患者が多いことが挙げられる。ステロイド副作用対策の薬剤が多数であること、易感染状態であること、免疫抑制剤と併用薬の薬物相互作用などから、治療に際して薬剤師による服薬指導・支援は重要である。感染制御、TDMや薬物相互作用の知識が活用でき、また患者も、免疫低下状態にあるHIV感染症患者に似た病態にあることから、レジデントの時に学んだ知識などを大いに発揮できると感じている。免疫抑制薬(シクロスポリンやタクロリムス)のTDMは医師から多く依頼されるが、リウマチ・膠原病分野における免疫抑制薬のTDMに関する情報は、抗菌薬や抗てんかん薬などに比べて少ない。そのため、免疫抑制薬TDMガイドライン移植領域編、論文、薬物動態パラメータなどを参考にし、医師と協議しながら日々試行錯誤して取り組んでいる。将来的にはリウマチ・膠原病分野におけるTDMに関するデータの蓄積による指標等の作成を目指したい。

5. 後進の指導

①レジデント

当院のレジデント制度は2017年度で8期生を迎える。レジデント修了生14名のうち、8名が当院に在籍しており、レジデントを修了した先輩が多くいることが強みだと考えている。同じ施設でレジデントを修了した先輩は、現役レジデントや私

にとって、最も身近な存在であり、その薬学的な教育、指導はもちろんのこと、日々の生活での悩みなども相談でき、非常に心強く感じている。レジデントは研修期間中に診療科または病棟を2～3ヵ月ごとにローテーションする。限られた時間の中で、自分の担当病棟・診療科を学んでもらうために心がけていることがある。それは、病態の進行や治療の理解を深めるため、治療の段階を追って服薬指導を行うことである。例えば、前立腺がんの患者の場合、入院してくる患者にも様々な段階がある。すなわち、診断のための前立腺生検による入院や、ホルモン療法、放射線療法、前立腺全摘術、化学療法、多発転移といった治療導入初期から終末期治療の段階までと様々であり、治療目的も完治、延命、QOL向上と異なることから、これらを系統立てて学べるように指導している。以上の点も踏まえて、レジデントカリキュラムは、レジデントとレジデント修了生の意見を取り入れることで、毎年ブラッシュアップしながらより良いカリキュラムを目指している。

②実務実習学生

当院の実務実習のスケジュールは大まかに調剤室：2週間、注射室：1週間、製剤室：1週間、薬務：1週間、医薬品情報室：1週間、病棟業務5週間の7部署、計11週間となっている。この期間に薬剤部以外に看護部、検査部、ME室、栄養管理室、放射線治療部、国際協力局などの他部署での実習・講義も組み込まれている(図1)。レジデントは実務実習学生と調剤室、注射室に関わることが多い。薬剤部の中でもレジデントは実務実習学生と年齢も近いことから、薬学なことだけでなく、将来の進路などの相談を受けることもある。レジデントは実務実習学生を教えることで様々な質問を受け、自身の知識の確認や質疑応答の対応力を身に付けることができる。現在は病棟業務を担当しているため、学生には病棟業務の基本的な内容から、各診療科における特徴や病態、他職種との連携について説明している。実際に患者の服薬指導を一緒に行い、ベッドサイドに行った際の注意点や観察のポイントなどについて指導を行っている。学生からの意外な視点や質問に気付かされることもあり、指導する側にも良い刺激となっている。

部署	1週	2週	3週	4週	5週	6週	7週	8週	9週	10週	11週
調剤室											
注射室											
製剤室											
DI室											
薬務											
病棟											

- 実習期間中には看護部、検査部、ME室、栄養管理室、放射線治療部、国際協力局といった他部署での実習も行われる。
- 最終週には1人5分程度の成果報告会が行われる。

図1 当院実務実習学生のスケジュール

当院では11週間の実務実習の最後に、学習し体験した成果を、5分程度にまとめて報告させている。成果報告会は製剤業務やTDMなどのセントラル業務、他部署との連携、病棟実習で関わった症例など様々な内容で報告される。指導を担当した薬剤師が発表スライド、報告内容に関する指導を行う。私も今まで3名の学生を担当し、担当患者の症例報告についてスライドの作成方法やプレゼンの方法などを指導した。また、成果報告会にも参加して学生の発表に対して指導薬剤師の立場としてコメントも行い、私自身も勉強になっている。

6. 最後に

後進の指導に関して述べてきたが、レジデントを修了してまだ1年、薬剤師としても3年しか経っておらず、私自身まだまだ学ぶことがたくさんあると日々感じている。ただし、薬剤師になる前に感じていた不安は、2年間のレジデント研修でなくなり、自信がついたと感じている。自信を

与えてくれた当院のレジデントプログラムと、指導していただいた多くの先輩薬剤師、他職種の方々には大変感謝している。

レジデント研修期間でしっかり学ぶことができたHIV感染症は、日本では患者数の少ない特殊な領域ではあるが、治療に使用する抗HIV薬の多くはcytochrome P450 (CYP) の基質であると同時に、その活性を阻害・誘導する作用があるため、CYPで代謝される併用薬との間で様々な相互作用の問題がある。免疫機能の低下によって様々な日和見感染症を引き起こすことも特徴であり、服薬支援の重要性ゆえに良好なコミュニケーションスキルが求められる。また、医療制度並びに法規制に関する知識も必要である。HIV感染症を通してレジデント研修の2年間で、総合病院で働くための幅広い知識を得ることができたと感じている。今後も、日々の業務から様々なことを吸収し、レジデント制度の充実、リウマチ・膠原病分野でのspecialistを目指して、奮闘していきたい。